

VOICE OF DESIGN

日本デザイン機構

Japan Institute of Design
東京都港区虎ノ門1-2-18虎ノ門興業ビル7F

Toranomon Kogyo Bldg.7F 1-2-18 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001 Japan
〒105-0001 Phone: (03)5521-1692 Fax: (03)5521-1693 1998年10月25日発行

VOL.4-3

特集 循環型社会のデザイン

持続可能な生活とデザイン

佐野 寛

東京学芸大学教授
クリエイティブディレクター



目次

特集 循環型社会のデザイン

- ・時評 持続可能な生活とデザイン 佐野 寛1.2
- ・公開座談会
【循環型社会のデザイナー—魅力ある生活像をめぐる—】
.....3~6
- ・フォーラム
【エコジカルデザイナー—ゼロエミッションへの途—】
.....7~9
- ・エコジカルデザインの歴史年表10.11
- ・エコジカルデザイン関連図書紹介12
- レポート「新百合ヶ丘街びらきシンポジウム」13~15
- インタビュー アレクサンダー・マヌー氏16.17
- 予告 京都シンポジウム「観光のためのデザイン」
開催にあたって 佐藤典司18
- 海外情報 EIDD誌リチャード・ロジャース講演録19
- 事務局から20
- ・広報委員会「やさしいデザインの本」出版計画
- ・編集委員会より、他

CONTENTS

- Special Issue
[Designs in a Circulatory Society]
- Leading Article1~2
- Open Discussion3~6
- Forum@Osaka7~9
- Book Review12
- Report13~15
- Interview16.17
- Information18.19
- From the Secretariat20

「デザインは何をしてきたか」

「デザインになにができるか」と栗津潔本機構理事が問を発してから30年経った。今われわれは、同じ問を自らに問うべき時を迎えている。そしてそのために、その30年「デザインは何をしてきたか」を総括しておく必要がある。この30年デザインは、正しくは「デザイナーの営為の集合」は、プラスマイナス共に巨大な大仕事を成し遂げてきたからだ。

いうまでもなく現文明は、アメリカ型大量生産・消費文明が極度に進化した文明だが、デザインはその大量生産—大量流通—大量宣伝—大量販売—大量消費—大量廃棄サイクルの各所で（正しくいえば大量廃棄を除く各所で）大活躍してきたのである。文明のインフラである都市や道路や住宅づくりの領域では都市計画家や建築家が、大量生産の領域では生産ラインにのるあらゆる製品のデザイナーが、大量流通の領域ではトラックや鉄道

車両のデザイナーが、大量宣伝の領域ではアートディレクターやコピーライターや写真家やイラストレーターが、大量販売の領域ではスーパーやコンビニの設計者や売場に並ぶ無数の商品やパッケージのデザイナーが、大量消費の領域では消費を促すマスメディアの番組や頁づくりのデザイナーが、大量廃棄の入り口部分ではゴミ箱やトイレのデザイナーが、各分野の人たちと共同して奮闘努力を続け、驚異的な経済成長を実現させてきたのである。

半世紀前、日本人にとってこの文明は、素晴らしいものだった。この文明の発展に疑問を持つ者など、少なくともデザイナーの中にはいなかった。60年代末、当時グラフィックデザイン近代化運動の先頭に立っていた日宣美の公募展審査会場に日宣美粉碎共闘（美共闘）が乱入して日宣美会員を「資本の飾職人」と極め付

Sustainable Life and Designs

In the past 30 years, designers have been contributing to the achievement of huge works which include both negative and positive aspects. The present society in Japan is modeled ultimately after American society with mass production and consumption. Designers have been playing their role in production, consumption, advertising, distribution, sales and waste and in the domains of the social infrastructure and city planning, i.e. civil engineering and housing construction. They were also very active in every possible way in the development of mass production lines. In the scenes of waste, designers of waste containers and

sewage facilities have been cooperating with specialists in those respective fields. This cooperation has contributed to the materialization of remarkable economic development. Half a century ago this civilization was wonderful for Japanese people. Nobody, at least, no designer, questioned this development. Towards the end of 60s there was a group of people who criticized the then leading movement of modernizing graphic designs questioning their relation with the capitalist system. But they, and even students and young people who were crying for the destruction of the establishment have been contributing to the development of mass consumption civilization

時評「持続可能な生活とデザイン」佐野 寛

けたとき、日宣美側は「悔しかったらいい作品を作ってみろ」と応酬した。美共闘はデザインの拠って立つシステムとデザイナーの関係を問題にしたのだが、日宣美のデザイナーは、オリンピック選手が「オリンピックという問題」など考えもせず「もっと早く、もっと高く、もっと強く」の努力をひたすら重ねると同様に、システムの内部でシステムの問題など考えもせずシステムが命じる競争を一心不乱に戦っていたのだ。だが体制の解体を叫ぶ全共闘たちも、一方では団塊世代の一員として、団塊世代という巨大消費者集団にすり寄る広告や新しい生活の素晴らしさを謳うメディアの大合唱に心奪われる消費者として、消費文明の大発展に貢献してきたのだ。若い彼らにとってこの文明は、文句なく素晴らしいものだったのだ。例えばあの水俣病は、レイチェル・カーソンが指摘したような文明システムの問題ではなく、企業モラルの問題でしかなかった。だからこそ、NOxやSOxを大量排出するトラック輸送が鉄道貨物輸送にとって代わることを、問題にもしなかったのだ。

そしてその「素晴らしい大量消費文明」の持続不可能性が明らかになった今、われわれは、地球生命圏を破壊するその文明が、全生命を道連れにして滅びることを座視するか、その文明を持続可能な方向に転回させて新しい地球文明を創り出していくか、二者択一を迫られている。すなわち、その新しい地球文明のために「デザインに何ができるか」を問うべき時がきたのである。

「デザインに何ができるか」

人間はデザインの中で生まれ、デザインの中で育ち、デザインの中で生きていく。生活環境を構成するあらゆるモノやイメージのすべてがデザインされたものであり、われわれデザイナーがデザインするものなのである。デザインが人間の環境を造る。だからこそその「デザインに何ができるか」なのである。デザインには、新しい環境のカタチを、新しいライフスタイルのカタチを、提示する力がある。その力を発揮するのだ。その時、キーワードは「持続可能な生活」なのである。

われわれデザイナーは、これまでの持続不可能な文明を造り、持続不可能な生活を提案してきた。そのことで食べてきたし、今も食べている。そのことを否定して明日から持続可能な環境づくり生活づくりに全面転換することは難しい。それはシステムからドロップアウトすることを意味する。それを実践している人は大勢いるが、ドロップアウトでシステムを動かすことは無理だ。われわれはシステムを動かさねばならない。システムを持続可能な方向に、エコノミーとエコロジーを止揚する方向に、1ミリずつでもいいから動かして行かなければならない。具体的には、その方向に向けたモノやスタイルをデザインしていくことを始めなければならない。

幸か不幸か今ゴミ問題が、この文明の持続不可能性をカタチにして消費者たちに突きつけている。われわれの活動の場を用意する企業が、持続可能性に向けて

方向転換せざるを得なくなりつつある。持続不可能な発展を地球全域に拡大しようというグローバル市場経済が内需拡大を迫っているが、いくら外圧を受けても消費が冷え切ったままである理由の過半は、狭い家に溢れているモノの山を捨てない限り、新しいモノを買っても置く場所がないこと、そして捨てられたモノの行く先をメディアが消費者たちに見せ始めたことにある。これまで廃棄物や排泄物を消費者の眼前から消し去っていた行政が、ゴミ処理場建設で行き詰まり、メディアの出勤を要請したのだ。遠からずゴミや廃棄物の製造&販売者責任が問われ始めグリーンコストの賦課が始まる。経営の未来を真剣に考える経営者なら、持続可能な方向への転換を考えないはずはない。

とはいえグローバル経済の戦場で過酷な生存競争を戦う企業は、生存競争のルールが持続可能な方向に転じ始めるまでは、否応なく持続不可能な発展を押し進めざるを得ない。そうした現実の中で、個々のデザイナーにできることは少ない。必要なのは団結だ。相呼応して動くことだ。そのために日本デザイン機構がある。皆がいつせいに声を上げれば、メディアが動く。それがシステムを動かしていく。そしてデザインは未来に向かうのだ。

1935年東京生まれ。東京芸術大学卒。89年にデザイン会社社長から東京学芸大学教授（デザイン講座）に。「21世紀的生活」など著書多数。日本デザイン機構理事。

as consumers. As such, no question was raised when freight traffic was shifted from railway to trucks that emit massive amounts of noxious exhaust gases. And the time has come to question "What role do designers have to play?" All the objects and images that compose our living environment are designed by designers. In other words, designers have the ability to suggest a new form of environment, and a new lifestyle. and the keyword for this is "sustainable life." So far we designers have been creating an unsustainable civilization and been suggesting an unsustainable life. However, we have to work on to the system steering it to a sustainable direction, i.e. to sublimate our econo-

my and ecology even to the slightest degree. The waste disposal problem is presenting itself as a warning to consumers that this civilization has become unsustainable. The industries which offer designers chances to be active are obliged to shift their direction to possible sustainability. In the near future the responsibilities of those who manufacture and sell commodities which produce wastes are going to be asked to bear green costs. And management must have long ranged perspectives of their business is bound to take this matter seriously. Enterprises that have to severely compete against each other for survival in a global scale of economy may have to promote unsustain-

able development until the rule of survival can be shifted to a sustainable direction. There is little room for individual designers to improve this situation against this trend. What they need is to be united and cooperate towards this end. The Japan Institute of Design exists for this purpose. If everybody jointly speaks up that can mobilize the media that may lead to shake the system and, as a result, a future perspective may be found for designing.

Hiroshi Sano / Creative Director

JD公開座談会「循環型社会のデザイン — 魅力ある生活像をめぐる」

11 Sep. 1998 於：建築会館

6月のマルチテーマフォーラム2における「エコロジーからデザインを読む」(詳細前号参照)の検討内容を受けて、循環型社会の構築に向けていかに魅力ある生活像をつくり出すかをテーマに議論を行った。



■討議メンバー

石山修武

Osamu Ishiyama

建築家、早稲田大学教授



金子修也

Shuya Kaneko

(株)GKグラフィックス社長
(社)日本パッケージデザイン協会理事



小林治人

Haruto Kobayashi

設景家



田村国昭

Kuniaki Tamura

(株)博報堂開発局局長代理



司会：

迫田幸雄

Yukio Sakoda

インダストリアルデザイナー

いま「環境」が日本に突きささっている金子：デザイナーはエコ・デザインに対して何者であるかについて「デザイナーは祝詞(のりと)をあげる人なんだ」と私は言っています。簡素化が貧相化になったのでは消費社会に受け入れられないし普及しない。では貧相から救うのは何か—これはまさにデザインの真骨頂だと。同時に価値観も変えていかないとならない。バージンものにこだわるのでなく再生材料なら再生ものの風合いをどう生かしていくか—これこそデザインの祝詞に関わってくるのではないかと。もちろん物的にしっかり対応することが前提ですが、最後にはやはり「ファインウェア」としてのデザインをどう役立てていくのかという考えが非常に有効だと思っています。ファインウェアの概念は元文化庁長官の植木 浩先生が提唱されたものでハードウェア、ソフトウェアに対するもう一つのウェアです。(本誌Vol.2-2 参照)

石山：建築分野で今後重要な問題になると思われるのが「ゴミ」の問題です。実は東京都で出されるゴミの半分近くは「建築ゴミ」です。新築の際に土を掘って出る汚泥(汚れた土)が地球環境スケールで問題が大きくなり、建物を建てることでゴミが発生するという自己矛盾が誰の目にもわかりやすくなってきているのが現状です。ゴミの問題を具体的にどうするか、様々な分野で問われ、しかも教育のレベルでも「教え」なくては行けない。科学的にも問題がある使えない材料が次々に明らかになって、ほとんどの新建材は使えないと。今まで、そういう材料

を使ってきたのも我々ですし、当然工業デザイナーもそれを生産してきた。それが人体に悪いということが建築を通してはっきりしてきたかなど。この問題が設計を通して今後は具体的にどう対処していかなければならない時代になってきていると痛感しています。

ただ今日、日本社会全体で「建築から環境へ」あるいは「エコロジー」の動きが表立ってきていますが、それは極めて怪しいと思います。実はまだ建築というのが成熟しないうちに既に崩壊している、というようなことも一つ言えるのではないかと考えています。私の日々の設計活動にしても非常に難しい、それも具体的に難しい所に直面しています。それが急速に分かりつつある。例えば自分が設計する近代建築も40年で大体取り壊しになりものすごく巨大なゴミになる。その問題もきちんと考えながら設計しなければならない時代です。

迫田(司会)：次にランドスケープ(景観)の立場から小林さん。

小林：私たちの場合「環境から人にアプローチしていく」という、どちらかというところ求心性を持った立場ですので、最初に5万分の1とか10万分の1のスケールの図面で広域的な面から環境を理解するためにランドスケープ・エコロジーを把握するという作業を日常的に行っています。全体的とか市全体の環境評価です。

2番目にそれをベースとしたランドスケープ・プランニングで大まかな土地利用計画(緑のマスタープランとか緑の基本計画と最近呼ばれているもの)を立て

OPEN DISCUSSION: DESIGN IN ENVIRONMENTAL SOCIETY - An Attractive Image of Life

* Environmental Issues are conspicuous in Japan now

KANEKO: If we design simple things, we must not design them badly, otherwise, consumers will not accept shabby designs, and the products will not sell well. At the same time, we have to change our values. We should not always use fresh materials, we must also make the best use of recycled materials. And finally we have to make efforts to employ the idea of "fineware," a suggested notion integrating hard-

ware and software to designing (ref. Vol.2-2 of Voice of Design).

ISHIYAMA: Almost half of the waste Tokyo produces is that from construction sites. Polluted soil dug out when constructing a new building causes an environmental problem on a global scale. How we should tackle the problem of waste from various aspects? This should also be taught at educational scenes. Materials improper to use have been scientifically discovered and reported. We have been using such materials and naturally industrial designers have been producing them. And now it is made clear that they are harmful to the human body. These days ecology is a big issue, but

I'm afraid it has been rather superficial. The fact is that the idea of architecture is already falling apart before the idea matures. For instance, if one is to design a modern building it will crumble in 40 years and has to be taken down producing a huge amount of rubble and waste. Therefore, one must design keeping the above mentioned fact in mind.

KOBAYASHI: We take the position of "approach persons from the environment." We try to assess landscapes of a certain area and its ecology from a wide-range perspective. At the next stage we will clarify the whole structure with a rough landscape, and a land use plan. Thirdly, we design each part based on

JD公開座談会「循環型社会のデザイン — 魅力ある生活像をめぐる」

環境全体の骨格を明らかにしていく。

3番目にそうした中で位置づけされたところをランドスケープ・デザイナーとしてデザインをしていく。

4番目はそれをランドスケープ・マネジメントの立場からいかに管理運営していくかが重要になってきます。

今日のテーブルではランドスケープ・エコロジーのレベルを中心に議論するのかと感じています。

迫田: 田村さんからは「情報系」あるいはものだけではなく側面からのアプローチを。

田村: 「環境」はいまや社会全体一国とか生活とかのど真ん中に据えて考える問題です。コンセプト、モノの作り方あるいはデザイナーそうしたものを環境という視点からもう一度組み替えていくことが何よりも急がれる。今、「環境」が日本に突きささって大きな自己矛盾を露呈しているにもかかわらずCO₂の6%削減に消極的であることひとつとっても、日本は国際的なリーダー国としての自覚が不足していると思える。「環境を守るといことは国益にかなう」…これはまた、国際的な利益にも通じることを証明していく。そのソーシャルデザインを意識的に描いて行くべきだ。配布資料の内、東京都の「循環的な社会に向けて—パート2」、[欧州に学ぶ21世紀の廃棄物管理システム—生活環境評価家・松田美夜子]のレポートはそのヒントとなると思う。

60年代に建てた家が殆どゴミになる時

金子: 包装は元々要らない、ノーパッケ

ージでいいかということ必ずしもそうではありません。以前国連がまとめた「食品品損失率」のデータがあります。要するに食料を口に入れるまでにどれだけ損失しているかです。いわゆる先進国G7辺りでは2%に満たないのですがアフリカ辺りでは70%前後もの率で損失してしまう。困っている国ほど口に入れにくいという矛盾が出ている。その一つの要因として「包装の不備」があり、散逸、虫や鼠に食べられるといったことがあります。その点でも包装は非常に重要です。

生活ゴミの中で包装ゴミは容積にして約6割、重量だと約4割を占めているということも考えておかなければいけないという観点から私たちも「ゴミ」を視点にしてパッケージを見直したところ、「エコロジー問題」は非常に具体的に浮かんできました。いかにゴミにしないか、ゴミにせず生かし直すか、ゴミを少なくするかといった取り組み方法を編み出して、整理体系化していくことに努めています。

石山: 今、住宅の総生産量は120万戸から100万戸とかなり低いレベルに下がってきたのですが、1960年代以降に建てられたものの建て替えが需要の大半になります。1960年代に建てたものは殆どゴミになるわけでも量も予測できていて、清掃工場を建てても追いつきません。すさまじいゴミの量です。

高齢社会の問題も、バリアフリーとかいろんな問題があるのですが「高齢化社会とは何か」というと「新築する意欲をなくした時代」といえます。新築の時代

は終り、もっとはっきり言うと大量生産、大量消費の時代は確実に終わってしまっていて、建て替えというか多品種多量の所へ現実には既に移行している。にもかかわらず建築をつくっていた人たちの頭が切り変わっていないところがあって、これは工業デザインの分野も同じではないか。

巨大な建築物の新築は経済が成長することを前提にしているので今は「新築の論理」は余り成り立ちません。今、建設不況とかゼネコン不況といっていますが「不況」ではなくて本当にネガティブな革命がおきているという観点で捉えていけないと実態をうまく理解できない。

「環境経済学」の成立

田村: スイスで「エコホテル大賞」を設けています。ホテルマンへの問いに「内装あるいは壁面の材料に関して徹底的な環境アセスメントをしているかどうか」という一項目があるほどです。ドアだとかそういったものがどんな材質で作られていて、しかもそれがリサイクル、リユースできるか—それをちゃんと見ているかなどが採点され「エコホテル大賞」が与えられる。建築生態学をきちんと理解していないとだめだというほどに進んでいます。そこまでやらないと「観光立国スイスを守れない」と。環境を守ることが憲法になっているのです。

また、よくドイツの例でフライブルグ市の環境政策が取り上げられますが、議論として忘れてならないのは、その環境政策が「反原発運動」が出发点だったということ。日本は30%から40%が原

this planning. Fourthly, we will plan how we will manage the whole area. It seems that we are entering an era when we must discuss landscape ecology.

TAMURA: I think the ecology issue suggests that we are in an era where fundamental changes should take place in various fields such as the legal system, our ways of thinking, information transmission and designing.

* Buildings built in the 1960s become waste

KANEKO: Some say that packaging is not necessary. Then, can we completely do away with it? Not always. A UN data on the rate of food loss in the course of delivery shows that the

rate is about 3 to 4% in developed countries but in developing areas like Africa the rate goes up to 70%. And one of the causes for the loss is improper packaging, i.e. scattered and eaten up by insects and rats. Packaging is important in this sense. We have to keep in mind that 60% of the whole weight of products is shared by packages. Putting emphasis on waste, we are trying to establish a rule tackling this problem; i.e. what is a good way not to produce waste: how should we minimize the amount of waste; how we recycle waste materials, etc.

ISHIYAMA: Demand for house construction is falling, and around 2020, the demand would be

mostly for repairs and renovation of the houses built in the 60s and later. The estimated amount of construction waste of these houses is so huge that even increased waste processing plants will not be able to accommodate it. I define the aged society to be where people have little will to build new buildings. The actual market situation is already shifting to renovation. However, the mentality of construction business people is unchanged. Now we are in the recession of the construction industry, but it is not a slump in the traditional meaning. We should look into the future of the construction industry in an aged society with low-economic growth.



上) 使用後容器の減容化により小さく乗てる。ゴミの保管や回収を容易にし、リサイクル等の適正排出をうながす。
下) 棄てずに使続ける親容器と再補給用パッケージのペアによる「リフィル化」の方法。

- A** ともかく少なく 「減量化」
- B** 迷わず安心 「排出容易化」
- C** 活かして使う 「再生材利用」
- D** 棄てず使う 「リフィル化」
- E** 何度も使う 「リターナブル化」
- F** 再び生かそう 「リサイクル化」
- G** その他の取り組み 「省エネ」「自然保護素材利用」

この頁の図版は全て、JPDA刊「エコパッケージデザインへの取り組み」付帯CD-ROMより転載させていただきました。(本誌12頁参照)



子力発電で日常の繁栄が保たれているのですが、ドイツは森林が国土の40%を占めていてそれが彼等にとっては最大の環境の、いわばアセスメントあるいは保護の対象になります。それを守るための反原発。従って国土を守るためにはああいう環境政策ということになってくるのです。実際に環境問題の基本的な所で彼等は生きようとしているのです。その中から沢山の産業が興ってます。ある種の環境が「環境経済学」を成立させている—そこが日本の自治体の関心を集めているところでもあります。

迫田: 日本の森林の維持の現実はどうですか。

小林: 日本は国土面積37万km²の68%が森林です。その半分が人工林です。問題

は国土緑化で一斉に単純林にしたことです。間伐材を何らかの形で木材として長く使える仕組みを考えられないかと思いますが、実は40年前後の使い頃の木が沢山あるのです。

石山: 僕は「間伐材は捨てろ」と言うのです。やはり経済原則というのはそういうものだろうから。僕は身の回りに緑を植えましょうという考え方はあまり賛成しない。バランス—極めて成熟した目というのは基本的にそうだと思うのです。きちんとコスト・経済原則に則った上で何ができるかということが一番大事だと思っています。やはり日本の木は高い、依然と高い、コストがかかっている。それをどういう商品にするかです。我々は何となく木造家屋とか住宅とかいう頭以

外に頭が働かない。そこが我々自身の創造力の問題ではないかと思います。使い方が悪いんだらうという気がしますね。

田村: 世界のコングロマリットは将来のエネルギーコストを考え既に動いています。太陽光発電、太陽電池、バイオマスなどそういうコスト計算をちゃんとやりながら技術開発をやっている日本の企業もあります。しかし技術開発には巨額の開発費を必要とします。メガカンパニーの相次ぐ合併は、この環境ビジネスを有利に導くための方法でもあるのです。

「単純なヒューマニズム」の時代をこえて
金子: 経済をもう少し身近に引き寄せると「始末」という言葉があった。その「末」は金にならないから「外部経済化」

*** Establishment of Eco-Economics**

TAMURA: Switzerland is so advanced that they give an "Eco-Hotel Award" to hotels that have a thorough understanding of ecology regarding hotel construction. Switzerland cannot survive as a state founded on tourism unless those hotel people have an understanding of this ecology. The environmental policy of Freiberg in Germany is often mentioned, but we must not forget the fact that the starting line of this policy is based on the people's anti-nuclear power station movement. Forests occupy 40% of German land, and are the object of environmental assessment or of protection. The anti-nuclear power station movement started from

the point of protecting forests. Actually German people are trying to live with serious concern about the environment, and various industries are arising from that.

KOBAYASHI: In Japan 68% of the land is forests and nearly half of them are artificially planted. Our problem is that we planted a single type of tree in our forestation campaigns. I only hope to establish a distribution system for lumber from thinning.

ISHIYAMA: I am suggesting we throw away thinned-out lumbers. I do not support the idea of "let's plant greens around us." The most important thing is to know what we could do based on accurate calculation of cost and

effect. Japanese trees are very costly and we must think how we could merchandise such expensive materials. We only think of houses and furniture. Aren't there more uses for lumber? This is something to do with our power of creativity. TAMURA: It is true that the conglomerates of the world are already taking steps considering energy costs of the future. There are some Japanese companies who are engaged in technical development while keeping cost calculation in mind. And various policies are being prepared in this line.

*** Beyond Simple Humanism**

KANEKO: Economy in terms of our daily life,

JD公開座談会「循環型社会のデザイン — 魅力ある生活像をめぐる」

で放り出す。要するにゴミの処理は社会、もっと大きくいうと、自然に委ねてつじつまを合わす。しかし、今後制度整備が進んで埋め立て基準も厳しくなる。当然ゴミ回収は有料化し、その中で商品が動くということも全部含めて考えていかなければいけない。

一方、包装材料などの領域で相当改善が進んでいて中にはエネルギー削減率70%の例もあります。やはり企業にとっては環境対応がコストダウンにつながり、かつ商品力が出てくることは積極的になる要因ですから、そういう経済の力は侮れないどころか有効に取り入れていかないと駄目なんだろうと思います。

迫田：石山さん、いわゆる「難民」のなかに政治的難民とは別にエコロジカルな側面、例えば自然破壊などの理由でなった人たちも多くいると思うのですが。

石山：その元に戦争があったり、それは多いと思います。リサイクルの問題も難民の問題も、「単純なヒューマニズム」の観点から見える時代はもうこえて、よりクールな経済的な目で見ることがあります。しかもそれが新しい形の産業になっていかないと皆一生懸命にならないのではないかというような気が最近はずします。

それから先ほどもいいましたが（最近聞いた話で一番はっとしたのは）高齢社会というのは「モノを作る意欲がなくなる」ということを前提にしなければいけない。そうすると新しく作る以外の我々の喜びみたいなものをきちんと発見して、しかもそれが商売になってくるのではないかなど。

小林：私は高齢社会ではその意味で「環境を作る・花や緑を育てる園芸のよるこび」などが浮上すると思う。モノをつくる意欲は高齢になってもおとろえるものではないと思う。ただその内容が少し変化する程度ではないか。

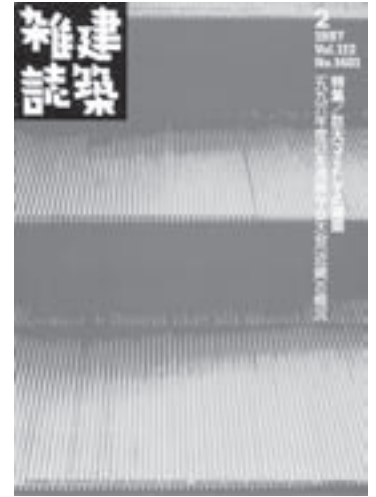
田村：「環境」に関しては皆「やろう」と思っている。しかし「お前やる？」となるとなかなか行動に結びつかない。私たちの思考、ライフスタイルはまだバブル後遺症に侵されている。

金子：経済的にも制度的にも、具体的なアイデアとしても、どういう風に組んでいくのかといったところへさしかかっている感じがします。



尚、誌面の都合で割愛しますが、編集委員の鳥越けい子氏より「経済の解釈」の質問。会場の野中寿晴氏より「環境問題のデザイナーの役割—自主性を高めることと制度の両輪、そして提案の重要性」との意見。石井賢康氏より「環境問題の視点の原点も子供時代に習慣的に体験する場の必要性（例として紙芝居）」との意見。鴨志田厚子氏より多くの観察を通して「高齢者もモノを作る意欲はなくなる。むしろ周りの環境がそうさせるのではないか」との反論があり大いに沸いた。

また座談会出席者より、傍聴者を含めて全員にA4、147枚の貴重な資料が配布されました。紙上を借りてお礼申し上げます。（文責：佐野邦雄）



日本建築学会「建築雑誌」2.1997
「巨大ゴミとしての建築」特集として「建築の消費学」（石山修武氏）体系化の糸口をさぐるべくルポルタージュとインタビューを中心に構成されている。

we used have the expression of SHIMATSU (literally, "beginning and end") that means the left-over odd ends had been cast away, i.e. waste disposal is left with society or nature. However, from now, reclamation will be strictly regulated. Naturally we have to pay for garbage collection, and commercial activities are likely to emerge from there. On the other hand remarkable improvement is seen in the field of packaging materials, some have achieved energy reduction by 70%. Tackling ecological problems will lead to reduction of costs for corporations, which may increase their competitiveness.

SAKOTA: Among so-called refugees there must be those displaced for reasons other than

political, ...ecological such as environmental destruction?

ISHIYAMA: Yes, wars could be the cause of such destruction. Both problems of refugees and recycling should be reviewed not from a simple humane standpoint but from a sheer economic viewpoint. Another thing we have to consider is to find new joys that can be developed into new businesses in the aged society on the assumption it has little desire to create new physical products.

KOBAYASHI: I think there may arise the joy of creating our environment. In England there is an idea called "ground work."

TAMURA: Most of us are willing to do some-

thing new for the environment. We think, "It would be nice if we did it." But taking action is another thing.

KANAKO: I feel we've come to the point we must tackle the problem anyway.

S. Kaneko / President of GK Graphics Inc.

O. Ishiyama / Architect

H. Kobayashi / Landscape Architect

K. Tamura / Hakuholdo Inc.

Y. Sakoda / Industrial Designer (Coordinator)

フォーラム「エコロジカルデザイン — ゼロエミッションへの途」

3 Oct. 1998 於：山西福祉記念会館ホール（大阪）

近代の反省にたって全体性を見透す

林：エコロジカル・デザインというテーマについて10年ぐらい前から建築・環境の分野から研究をしてきています。1980年代末に環境保護団体からコンクリート型枠材として南方材を野放しに使っていて、建築家は何を考えているのかという問いをつきつけられました。その後、環境NGOの方々とボルネオの自然の中で暮らす人々の生活圏が森林伐採で狭まっている実体を見て、建築をつくる根本を見直したいと考えたのです。

来年の6月に北京で国際建築家連合（UIA）の大会が開かれます。キーワードはサステナビリティ、多様性そしてグローバル（グローバル＋ローカル）などがあります。私は「未来の建築」という分科会に属し、4年前から東京、ヘルシンキそしてこの7月にドイツのカッセルで準備会を開催しました。カッセルではそれぞれが具体的な問題をもって討議しました。私のテーマはエコロジカル・デザインです。これに関しては私が翻訳したシム・ヴァンダーリンの「エコロジカル・デザイン」（本誌12ページ参

照）では、目に見える形から方法、システムなどのソフトまでの広範にわたっての環境負荷の少ないデザイン全てを含むと定義されています。

いまエコロジーに関していろいろところで盛んに話されています。それは今の生活がエコロジカルではないからです。エコロジーとは様々な物の関係や共生のあり方を見ることです。その関係性がいま途切れています。近代科学は縦割りになっていて、それぞれの専門性は深いかも知れないが、相関性がない。全体性が見えなくなっている。近代主義の反省の中で全体を見直し、そこを貫く軸を見いださなくてはならない。その軸が循環型社会ということ。世の中のベクトルはそちらに向かっていると確信しています。今必要なことは、これまでの一方通行の流れとは別の循環型の文脈で未来を透視することです。

カッセルで私が提起した問題は、こうした前提で次のような事例紹介に基づくものでした。一つはスクラップ&ビルドの現在の生活のあり様を、道ばたで見た建築物の解体現場から問題提起しました。スクラップされる建築が年間20万戸もある。住宅は20～25年で壊される。そのほとんどが



廃材を再生した木製ブロックとこれを利用した住宅。

Ecological Design - Path to Zero Emission

HAYASHI: Ecology is a popular topic of the town. That means that the present life is not ecological. Modern science is branched into special fields, which are not inter-related, and no one sees science in its entirety. We must look into modernity critically, and find a principle that will be applied to every field of speciality. The principle can be a circulatory society. I am confident that the general trend of the society is directed into that. What we need today is to see our future in the context of a circulatory system. Based on this concept, I would like to identify problems. One is to review the present "scrap and build" way of construction. Houses

are demolished 20 years or 25 years after they are built. Most of the construction wastes are burnt or disposed in a landfill. We must change this. Second is to appreciate Japanese traditional architecture. Third is to reuse the disposed lumber. A demolisher in Gunma prefecture makes wooden blocks out of wastes, which can be used to build a house and furniture. I tested these blocks, and find them useful to build temporary houses repeatedly to help people displaced because of natural disasters.

SHIINO: Life Cycle Assessment (LCA) is meant to evaluate and quantify the loads of the whole process of a product from manufacturing to

disposal or burial with treatment. This must be changed. The second is the sustainability of buildings. This is one of the traditional Japanese building structures. We should look at it from a new perspective. The third is the specific work of the people who are dismantling buildings. I introduced the work of a person who dismantles old buildings and recycles the wood into wooden blocks for reuse. This is the practice of LCA. We can use these blocks to build houses and furniture. I also tried it. We can stockpile these materials and use them for disaster relief housing and so on.

(以下スライドによる事例紹介)

環境調和性の高い製品が生む新たな価値

椎野：ライフサイクル・アセスメント（LCA）とは製品のゆりかご（製造）から墓場（廃棄）までの環境負荷を評価、定量化することです。評価項目には地球温暖化や酸性雨などがあります。製造から廃棄にいたる各段階で始めからエコロジカルな視点で製品をデザインすれば、後から回避、除去する環境負荷より決定的に少ない。家電製品にLCAを導入することで設計改善による環境面での優位性を定量的に把握し、環境調和性を向上することができます。環境への配慮という新たな視点を開発部門へ素早く還元できる。環境調和性の高い製品は新たな付加価値を生み、結果としてユーザー自身が自ずと環境保全に貢献することになります。環境負荷の特長は次のように言えます。一つに個々ではその値は比較的小さい。二つにその個々の蓄積が大きな値となる。蓄積として出た結果を直接規制

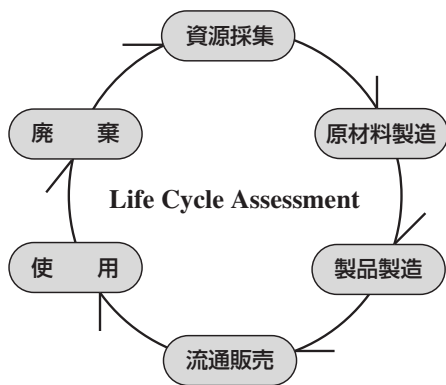
disposal on the environment. It looks into the cycle of collecting natural resources (cutting trees, and the economic value of recycled materials), manufacturing the parts materials (pollution), manufacturing (toxic substances), distribution and sales (emission gas pollution), use (energy saving), disposal, and collecting resources. Problems may be caused at each stage, and the entire cycle may not be circulated. By introducing LCA, it is intended to minimize the occurrence of problems by quantifying problems at each stage. If we take ecological consideration into account at every stage of product life from the beginning of design conception and disposal, the load on

フォーラム「エコロジカルデザイン — ゼロエミッションへの途」

したり防止技術で対応することが難しいということです。だから始めから個々に対応することが重要なのです。

建築関連の話では、地球環境に対するインパクト例えばCO₂の排出量の約半分は建築関係です。世界経済の1/10は住宅やオフィスの建設、設備や運営関連で、使用する材料の4割が建物です。またエネルギーの1/3が建物の運営に使用されています。24時間使われているビルの電気消費量が莫大なのです。さらに建築の解体で年間9千万tのゴミが発生しています。

次に何故いまLCAなのかということです。LCAは資源採取→原材料の製造→製品の製造→流通販売→使用→廃棄→資源採取の循環を見ることです。資源採取では木材の乱伐や再生素材の経済性、原材料の製造では公害、製品の製造では有害物質、流通販売では廃棄ガス汚染、使用では省エネなどの問題が各段階で発生していて、うまく循環していないということがあります。これらをそれぞれに定量的に把握しながら最少化を計り循環させようとするのがLCAなのです。



the environment is much less than that to be applied at a later stage to avoid or remove pollutants. By introducing LCA in the production of consumer electric apparatuses, the advantage of design improvement would be quantitatively understood, and that will help enhance the level of harmony with the environment. A new concept of environmental consideration could be reflected in the product development process. Environmentally-considerate products will have added values, and as a result, consumers will contribute to the preservation of the environment. With a concept of "green design," we are now studying the method of selecting materials by applying LCA. For this purpose, it

温暖化などの地球環境問題を分析項目とするLCAの一步前の段階には循環の各段階でのインプットとしてのエネルギー量や資源量とアウトプットとしてのCO₂やNO_xなどの具体的な項目を見るライフサイクル・インベントリ (LCI) 分析があります。CO₂やNO_xなどの地球温暖化に対する影響度を係数化して複数の項目を統合化して検討します。

私達はいまグリーンデザインという考え方をもちLCAを使って材料選択技術の検討を行っています。環境負荷と物性のバランスのいい材料選択をしようという試みです。LCAは環境にやさしいということについて定量的に評価分析する手法です。これによってメーカーとしての競争力を強化でき、改良のための材料選択、設計、期間把握などの規準値や目標値を確認することができるのです。各現場でのデータ蓄積が重要になります。これをCADデータにのせることも試みています。

エコロジカルな生活は美しい

林：主要製品のライフサイクル・エネルギーで廃棄段階で皆0になっているのは何故ですか。何らかのインパクトがあるはずと思いますが。

椎野：LCA分析では殆ど0としてしか表れてきません。違う次元で「廃棄」だけを見る必要があると考えています。LCAの評価項目の地球温暖化などではなく、廃棄物の処理場がなくなるとか、埋め立て地がなくなるなどです。しかし例えば環境インパクトのある水銀は照明ランプの

is important to accumulate data at various production sites. We are trying to build a CAD database.

* Sustainability

MINAMI: How can we address the question of sustainability?

HAYASHI: Sustainable development was the theme of the Earth Summit. Behind this were apprehensions that if we continue our lifestyle as it is now, the future of the earth is tragic. In construction, we need to consider ways to prolong endurance, and to maintain buildings with less energy. The theme also suggests more simple, ecological ways of living to people.

MINAMI: The Japanese traditional architecture

廃棄から出る量より化石燃料からの方が多く出る可能性があります。化石燃料は電力使用時に使われるものですから廃棄段階より使用段階の方がインパクトは大きいということになります。

南：サステナビリティに関して具体的な方法をどう考えればいいのか。

林：持続可能な開発は地球サミットのテーマですが、それが出てきた背景は今のライフスタイル、人と物の関係のままでは将来がないということでしょう。先進国の発展は地球資源をもとにしてきましたが、そうした資源が無限にあるという幻想はもう持てません。建築で言えばスクラップ&ビルドでなく、耐用年数を伸ばすことや少ないエネルギーで維持することなどを具体的に実行しなければならない。LCAを建築でも考えてみなければならない。またこのテーマは生活そのもの話でもあります。エコロジカルな生活はシンプルで豊かで美しい。決して窮屈といった負のイメージではない。むしろ今の生活の方が粋が決められ重苦しいと思います。

プロセスは科学的、結果は自然を活用

南：ドイツのある町は盆地のために風通しが非常に悪かった。そこで風向きの研究をし、その結果をもって森をつくり直した。ビオトープという自然に近い状態の手法で実践し、盆地を蘇生させたといいます。日本の伝統建築や生活スタイルにも自然の導入例が多く見られますが、今の生活の中でどうバランスをはかったらいいのか。

and lifestyle take advantage of the natural environment. How can we keep balance with nature in our contemporary life?

HAYASHI: I would like to use more natural materials and build houses without relying too much on machinery. To reach that level, however, we should take advantage of high-tech and scientific knowledge.

KANO: The initial cost for building a house is too expensive now. If we minimize the use of machinery, the cost will be lowered. From the environmental point of view, we haven't yet arrived at a conclusion of which structure, wooden, iron or concrete is the best. In order to give long life to a house, the attachment of the

■討議メンバー

林 昭男

Akio Hayashi
滋賀県立大学環境科学部教授



椎野 徹

Toru Shiino
松下電器産業(株)
生活環境システム開発センター



司会：

南 武

Takeshi Minami
インダストリアルデザイナー



林：デザインのプロセスの様々な段階できめ細かな評価ができていない。LCAを今の建築にあてはめ分析評価する必要が急務です。そうした中で工業部品だけに頼らず自然素材や自然を生かした機械力に余り頼らないパッシブ建築をつくるべきです。しかしそこにいたるプロセスにはハイテクや科学力を活用しなければと思います。シム・ヴァンダーリンの建築も藁を圧縮した建材などの自然素材を活かしています。しかしその設計プロセスはコンピューターを高度に利用したものです。

椎野：サステナビリティはこれからの課題です。今まで企業活動のインセンティブは経済でした。ここにきて環境をインセンティブにするようになってきた。さらに推し進めるには環境問題を定量化すること目に見えるようにすることが大事です。LCAにしても感覚的には解っていたことですが、定量化することで問題がはっきり見えるようになり企業活動のインセンティブとなってきました。

新たな算盤による環境経済

伊坂：環境問題への取り組みは目的や倫理もあるが経済は無視できない。環境問題を経済の中に取り込む環境経済学というものもインセンティブになるのではないか。

椎野：廃棄物の発生で目に見えない負のコストが発生しています。それを収支0もしくは経済価値を生むことを考えています。ドイツのポッシュ社では電気ドリルを回収して分解、リサイクルしていま

す。分解に人手がいるわけですが新たな雇用をつくりだしているとも言えます。一般論で言えば環境経済という面でドイツは収支0、欧州全体はそれに近づいているが日本はまだの感があります。

林：エコライフは高くつくという認識がありますが、そこを突き破る突破口があると思います。先ほど紹介した廃材から新製品を生むなどはそうした突破口の一つでしょう。高齢者の眠れる能力を社会貢献に活用するなど、これからの生き方を含めて検討する必要があります。環境経済には別の算盤が必要です。

福岡（会場）：ガーデニングショップで牛糞や駱駝の糞をリサイクルしてプランターを作っているといった例もあります。何か新たな生き方がいるのでしょうか。

加納（会場）：今の住宅は装置化しているためイニシャルコストが高い。パッシブ+機械のハイブリッドにすればイニシャルもランニングもコストが安くなります。環境にやさしいという面で木造、鉄骨、コンクリートがいいのかまだ答がでない。

椎野：データは往々にしてデータをつくる企業に優位にできてがちです。それはデータ化に際して仮定に差があるからです。木造、鉄骨、コンクリートを比較するとそれぞれが優位とでるでしょう。機能の違う物を比較するのはある面で危険です。

ロングライフデザインへの愛着

加納：住宅に関して言えば基本的には長寿命化がある。そうした中で愛着のもて

るデザインが求められる。器などもいいものはいいし、愛着をもって長く使う。

井生（会場）：フィンランドではロングライフデザインとよく言います。確かにアルヴァー・アアルトの家具やカイ・フランクの器などはいまだに新鮮で売られ続けている。また壊れても直して使っている。

山内（会場）：エコロジカル・デザインを進めるには価値観などの変化を促すこともあるが、公の評価機関のようなものがあると思う。希望のある小さな芽からはじめるということも大事だが、マスのところですることが必要。工業製品へのGマーク制度があるが、これなどを根本的に見直すことも考えなければならぬと思う。またデザイン評論家も必要だ。広範なデザイン運動とする必要があると思います。

南：茶の世界ではしつらえを「室礼」と書くらしい。物に対する心の持ちかたの凝縮性を感じる。エコロジカル・デザインにも、このことは一つの要因として大きな位置を占める。そうしたことも含めてこのテーマはさらに検討してゆきたいと考えます。

（文責：伊坂正人）



residents is also an important factor.

IOH : In Finland, long-life design is appreciated and Alvar Aalto's furniture and Kaj Franck's tableware are still selling well, and are used long by repairing.

* New Incentives

SHIINO: Until today, economic development gave an incentive for business activities, and from now, the environmental concern is likely to become an incentive. For this, the quantification of environmental concerns must be established so that efforts made by corporations can become visible.

ISAKA: The concept of "Ecomics" by which environmental concerns are incorporated with-

in the economy can be introduced as an incentive.

SHIINO: Invisible negative costs are incurred because of waste disposal. I am thinking of ways to make waste into something with a positive economic value, or at least to bring that cost to zero. Waste recycling may open up new employment opportunities.

HAYASHI: People have a preconceived idea that ecological life is costly. There should be a breakthrough to motivate consumers in that direction, something like making new products out of waste timber, or providing opportunities for retired people to take part in productive activities.

FUKUMA: Some gardening shops sell planters with soil prepared by recycling dung.

YAMAUCHI: There needs to be a public evaluation agency in order to promote ecological design, and we should organize a design movement toward this end.

Akio Hayashi / Prof. The University of Shiga Prefecture, School of Environmental Science

Toru Shiino / Human Environmental Systems Development Center, Matsushita Electric Industrial Co. Ltd.,

Takeshi Minami / Industrial Designer

世界のうごき

- 1945 原子爆弾完成日本に投下
第一回国連総会
マラリア駆除にDDTが効果
- 1946 新農薬TEPPを発見
電子計算機ENIAC開発
- 1947
- 1948 DDTで副腎皮質細胞破壊
トランジスタ発明
- 1949 中華人民共和国成立
英、ジェット旅客機実用化
- 1950
朝鮮戦争
- 1951 サンフランシスコ講和条約
米、原子力発電所1号
- 1952 英、原爆実験。米、湿式水爆の実験、原子力空母建造着工
ロンドン、スモッグ
- 1953 ソ連、乾式水爆製造、実験
- 1954 ビキニ水爆実験
太陽電池発明
ソ連、原発操業。米、原潜完成
- 1955 昆虫駆除化学薬品でイエローストーン川の魚大量死
スエズ動乱
- 1956 フルシチョフ、スターリン批判

EEC発足
- 1959 米、加州湖水でDDT使用禁止
英、ヒ素剤禁止の政令
キューバ革命
- 1960 ビートルズ
米国への輸入車、米小型市場占拠
レーザー発振成功
- 1961 濠州、ヒ素剤禁止令
有人衛星ボストーク1号
「地球は青かった」
- 1962 「沈黙の春」出版、大反響
米、人間衛星打上げ成功
- 1963 米英ソ、部分的核実験停止条約
- 1964 初のワープロ
中国、原爆実験
- 1965 ベトナム戦争でダイオキシンを含む枯葉剤を使用
- 1966 商用燃料電池開発はじまる
- 1967 EC発足。中国、水爆実験

日本のうごき

- 無条件降伏
進駐軍 ジープ
- 天皇人間宣言
日本国憲法公布
6・3制義務教育実施
暮しの手帖創刊
マッチ自由販売
湯川秀樹ノーベル賞
お年玉つき年賀はがき
レッドパージ
特需景気
日米安保条約調印
民放ラヂオ発足
この頃まで、シラミ駆除のため
DDTを頭に振りかける
砂糖自由販売
TV放送開始
スーパーマーケット登場
第五福龍丸被爆
日米航空第1便
戦後初の地下鉄
神通川イタイイタイ病
ディズニーランドLA
アルミの1円玉
日ソ国交回復 国連加盟
「もはや戦後ではない」
水俣病発見
太陽族。団地族
東海村原子炉点火
なべ底不況
東京タワー
インスタントラーメン
JETRO発足
ビジネス特急こだま
カミナリ族
皇太子御成婚
岩戸景気
安保闘争
三種の神器
所得倍増計画
通勤地獄
レジャーブーム
建売住宅
消費者協会
「都市公害」の言葉

東海道新幹線開業
東京オリンピック
「沈黙の春」日本で出版
朝永振一郎ノーベル賞
新潟水俣病 3C時代
マイカー元年640万台
公害対策基本法

デザイン関連事象

- 「工芸ニュース」復刊
「建築雑誌」復刊
トラック生産再開
モーン蛇口
ヴェスパスクーター
イームズ・プライウッドチェア
サーリネン・アームチェア
ボラロイドランドカメラ
ウェグナー・ラウンドチェア
シコルスキー・S-58ヘリコプター
オリベッティ・レッテラタイプライター
アアルト・MIT学生寮ベーカーハウス
レイモンド・ローウィ来日
ハーバード大学グラデュエイトセンター
ボルシェ356
グレイハウンド・シーニクルーザー
コルビジェ・ユニテダビタシオン
ブランドウィック学校用家具
ロンシャン礼拝堂着工
マツダ三輪トラックCHTA
バックミンスターフラージオデジックドーム
シャンディガール・シビックセンター
東芝電気釜ER-4
シトロエンDS-18
ゲンセ・フォーカス食器
バタフライズツールT-7238
ネッキ・ミレラミシン
日宣美「原子力平和利用」ポスター
ウツソン・シドニーオペラハウス案当選
ヤマハオートバイYD-1 Gマーク選定事業開始
イームズ・ラウンジチェア
白山陶器しょうゆ差しG型
ソニートランジスタラジオTR-610世界ヒット
スーパーカブC-100
ダイハツミゼット
ニコンF
ライト没、グッゲンハイム美術館落成
モーリスミニマイナー
ソニー世界初のオールドランジスタTV8-301
世界デザイン会議
ゼロックス複写機
山川ラタン籐椅子C-3150
キッコーマンしょうゆ卓上瓶
IBMセレクトリック・タイプライター
コダック・カラーセル・スライド映写機
ぺんてる・サインペン
吉村順三・NCRビルディング
キャノンダイヤル35
リア軽ジェット輸送機
フォード・ムスタング
フジカシングル8「私にも撮せます。」
ベル・トリムライン電話機
京都国際会館 国立劇場
ヤクルト・プラスチック使い捨て容器（後に回収）

エコ・デザインがいつ頃から意識されはじめたのかが知りたくて、編集委員会が荒削りに試みたものです。反エコ・デザインも、エコらしきも一緒になっています。

1968 核拡散防止条約。LSI発明 英、電気式配送車4万5千台	ヒッピー、フーテン族 大学紛争。小笠原返還	霞ヶ関ビル セイコークオーツ
1969 アポロ11号月面着陸 コンコルド音速突破	プラスチックビニール公害 消費者運動	親和銀行本店 愛知県立芸術大学
1970 全米でアースデイ集会 米、自動車 車放出大気汚染物1億2千万トン	公害深刻化、欠陥車 大阪万博	ニーチェアX 千里ニュータウン 液晶LSI
1971 ラムサール条約採択	環境庁発足	「生きのびるためのデザイン」V.パバネック
1972 ストックホルム国連人間環境宣言 行動計画、国連環境計画設立 ローマクラブ「成長の限界」	沖縄返還 日中国交正常化 日本列島改造論	四日市訴訟原告勝訴 中銀カプセル ホンダシビック (CVCCエンジン)
1973 第四次中東戦争。拡大EC発足	石油危機 公害健康被害補償法	ゴミ戦争 世界デザイン会議京都 林刃物プレス打抜きステンレス事務録
1974 陸上源由来海洋汚染防止パリ条約	自然志向、自転車ブーム	
1975 米、大気浄化法 ベトナム戦争終結	マツダ、ロータリーとサーマルリアクターで、ホンダ、層状給気で適合 沖縄海洋博	原付自転車 紙容器カップ麺 ピアノ、ロジャース・ポンピドゥセンター
1976 伊でダイオキシン汚染 国連人間居住会議	ロッキード事件発覚	
1977 国連砂漠化防止行動計画	カラオケブーム	国立民族学博物館
1978 米、北欧フロン入スプレー禁止	成田開港	オリンパスカプセル型カメラ
1979 米、スリーマイル島原発事故 西独、世界初エコマーク	ノーブランド商品 「ウサギ小屋」	ウォークマンTPS-12
1980 米、酸性降下物法。酸性雨研究プ ログラム開始 グランドワーク運動	「スモールイズビューティフル」マイクロエレクトロニクスの時代 家庭内暴力、校内暴力	モニターTVプロフィールKX-27HF1 レーザーディスク
1981 米、二酸化炭素影響研究 スペースシャトル打上げ成功	宅配急増。フィットネス リサイクル運動高まる	ポストモダン PC98パソコン CG 省エネタンカー オフィスオートメーション
1982 戦略核兵器削減交渉	DIY盛ん	
1983 国連環境と開発に関する世界委 (日本提唱)		
1984 シリコンバレーIC工場排水が地下 水に混入 ポーパル化学工場中毒		
1985 オゾン層保護ウィーン条約	電電、専売民営化	海外へ工場移転始まる
1986 チェルノブイリ原発事故	地価高騰、地上げ	オルセー駅、美術館に再生 香港上海銀行 「写るんです」
1987 米化学環境改善委が環境と健康に 及ぼす農薬の影響に関するシンポ	国鉄民営化。財テク。 「エコロジー」円高	関西国際空港着工 電子手帳 DATデジタルオーディオテープレコーダー 青函トンネル
1988 世界異常気象で地球環境への一般 の関心高まる グリーン・コンシューマリズム	瀬戸大橋	
1989 ウィーン条約及びモントリオール 議定書第一回締結国会議ヘルシン キ宣言。特定フロン今世紀中全廃 ベルリンの壁崩壊 天安門事件	日米経済摩擦 消費税 地球環境保全東京会議 昭和天皇没	世界デザイン会議名古屋 デザインイヤー 幕張メッセ
1990 地球温暖化防止行動計画 アラスカでタンカー大事故汚染	バブル崩壊始まる 花と緑の博覧会	車椅子CARNA
1991 湾岸戦争、原油流出油井火災 エコ・アジア会議東京	再生資源利用促進法 廃棄物処理法改正 建設廃棄物再利用率35%	AF一眼レフカメラ・IOS-1 環境デザインフォーラム地球に優しい空間創造 Gマーク地球に優しいデザイン賞
1992 リオ地球サミットAJENDA21	環境共生住宅支援制度	磯崎新・パラウ・サン・ジョルディ室内競技場
1993 第二次戦略兵器削減条約	環境基本法	京浜東北線209形通勤電車
1994	大江健三郎ノーベル文学賞	RV車流行
1995 GATTがWTOに発展 地球温暖化防止会議COP1	阪神大震災 地下鉄サリン事件 一般廃棄物5千万トン 産廃4億トン	ネジ巻式ラジオ 容器包装リサイクル法
1996 ISO14000		
1997 地球温暖化防止京都会議COP3	建設廃棄物産廃の20%	

Special Issue

循環型社会のデザイン：関連図書紹介



価格：2800円＋税

エコロジカル・デザイン

ビオシティ

著者：シム・ヴァンダーリン

＋スチュアート・コーワン

訳者：林 昭男＋渡 和由

■書評——伊坂正人

エコロジカル・デザインを自然のプロセスを統合することによって環境の破壊的影響を最小化するすべてのデザイン形態と定義。ある特定の場所についての深い知識をもつことから始め、場所のもつ微妙なニュアンスに敏感になれば環境を破壊することなく共存する道が開けるにちがいないと説く。「答えは場所にあり」「エコ収支がデザインの方向を決める」「自然のしくみに沿ってデザインする」「誰もがデザイナー」「自然をきわだたせてつくる」の5原則を提起している。また近代デザインの批判の一方エコロジー・デザインにつながる成果の評価をふまえた歴史を概括。その上で世界の動向を生物の多様性や複雑系への対応、エコ収支や産業エコシステム、生活者の参加のシステムなどの幅広い事例で紹介しながら次代のビジョンを説いている。

Book Review

Ecological Design <BioCity>, Sim Van der Rym & Stuart Cowan.

The authors claim that if we become sensitive to the delicate nuance that a specific place has, we can explore a path to living together without destroying the environment. While criticizing modern design, they overview the history of design which may lead to ecological design. They further introduce trends in the world such as measures against biological diversity and complex systems, ecological balance of payment, industrial eco-system, and consumer participation system, to set forth their visions of the future. (Isaka)



価格：4100円＋税

地球のためのデザイン

建築とデザインにおける生態学と論理学

鹿島出版会

著者：ヴィクター・パパネック

訳：大島俊三＋村上太佳子＋城崎照彦

序文：栄久庵憲司

■書評——迫田幸雄

あまりにも有名な「生きのびるためのデザイン」の著者パパネックの遺稿である。副題「建築とデザインにおける生態学と論理学」が示すように、持続可能な調和のある生活の在り方を見出すために、デザインと建築の領域とエコロジーと環境の問題の、両者間の関係を吟味し、デザインや建築における倫理的責任と精神的価値の問題が提起されている。あるデザイン、ある建築の理解や評価の力は、もっぱら視覚に頼っているだけでは減衰してしまうと説き、かつて人々は自然の本質すなわちエコロジーの核心を理解し、自然に対し極めて謙虚であったように、全感覚を動員してその造りを読み取る喜びを獲得する方法を明かしている。しかし本書は「自然に帰ろう」との主張ではなく、人類に本来備わっている倫理的資質を鼓舞し、明るい未来を構築しようと呼びかけている。

The Green Imperative

Ecology and Ethics in Design and Architecture, Victor Paraneck, 1995

As shown in the subtitle, the author examines the relations between design/architecture and ecology/environment, and puts forward the ethical responsibility of architects and designers in an effort to search for a sustainable lifestyle compatible with the environment. He proposes that each person should encourage one's ethical elements to live up to ecological life.

(Sakoda)



価格：2500円
(CD-ROM付、送料別)

エコパッケージデザインへの取り組み

[製品アセスメント個別指導書作成事業報告書]＋CD-ROM(Macintosh対応)

(社)日本パッケージデザイン協会

■書評——黒田宏治

エコパッケージデザインとは、環境保全に配慮するパッケージのためのデザインを意味している。エコパッケージへの取り組みは時代の要請である。そこで、日本パッケージデザイン協会が中心になり、関連する情報を公開・共有できるよう、具体例154件を収集し、包装技術、デザイン、流通等専門家からの提起も加え、一冊の報告書にまとめたものである。具体例は写真付きで紙、プラスチック、金属など素材別に分類され、個別ケース毎に開発・改良のポイント、デザインのねらい、消費者の反応・評価等が簡潔に分析・整理されている。一口にエコパッケージデザインといっても、減量化、再生材利用、リフィール化など、いくつかの方法があり、また定着に向けて技術的・制度的な課題も少なくない。もはや傍観者ではいられない。まずこの分野の実態を俯瞰するために、便利な一冊である。

Eco-Package Design (book and CD-ROM) by Japan Package Design Association

Information about ecological packaging is shared by 154 examples. Proposals and comments by experts in packaging technologies, design and distribution are included. Packages are divided by material, i.e., paper, plastics and metal. Points for development or improvement, aims of design, consumer reactions and evaluation are analyzed briefly for each package.

(Kuroda)

取材報告 「新しいパートナーシップ型まちづくり」：新百合ヶ丘街びらき記念シンポジウム

主催：(財)川崎新都心街づくり財団

コーポラティブ・デザイン

—新百合ヶ丘の実践

大塚 洋明 都市計画家

新百合ヶ丘の“街びらき”記念シンポジウムが9月19日の土曜日の午後に開催された。新宿から小田急線で20分程の新百合ヶ丘の街づくりは、ちょうど30年前に“農住都市”という都市と農業の共生をコンセプトとして農家地権者が自ら主体となって始めた街づくり事業で、わが国では画期的な都市開発事例である。

こうした理念に共感して私も微力ながらこれまでお手伝いしてきたのだが、街びらきという節目の時に、これを機会に新百合ヶ丘の街づくりをもっと多くの方々に知ってもらおうとシンポジウムの企画をした次第である。基調講演にはJDの仲間である鳥越けい子さんをお願いし、シンポジウムには私がコーディネーターをつとめ、佐野寛さんにパネラーとしてご参加頂いた。

当日は川崎市から納 宏助役にもご参加頂き、熱心な討議が続いた。当日上映された、30年間の記録ビデオも知人のNHKエンタープライゼスの大物プロデューサーに編集していただいて、なかなか面白い映像ができあがった。新百合ヶ丘の街づくりはこれからも続き、JDとして本格的に“美しい都市づくり・住宅地づくり”に多くの方々の参加をお願いしていきたい。

Cooperative Design - Shin-Yurigaoka

Shin-Yurigaoka located at a 20-minute ride on an express train is an epoch-making urban planning project initiated 30 years ago by the farmland owners as a "rural residential city" where city life and farming life can coexist.

To mark the 30th anniversary, we held a symposium. We invited Ms. Keiko Torigoe, member of JD as a keynote speaker, and I served as a coordinator. The vice-mayor of Kawasaki city also attended. The urban development project in this district is ongoing. We invite many designers to take part in the building a "beautiful city and residential district."

Hiroaki Otsuka / City Planner

基調講演：「美しい都市への提言」

鳥越けい子 聖心女子大学助教授、
サウンドスケープデザイナー

失われた時を求めて

大分県の竹田という街は、阿蘇くじゅうの山並みに囲まれた盆地にあり、歴史と文化の薫り高く、九州の小京都とも呼ばれている。南画の田能村竹田も、彫刻家の朝倉文夫も、この地で生まれ創作のうちこんだ。アーティストの感性を育む街並みや自然があったのだと思う。

そして瀧廉太郎も、多感な少年時代をここで過ごしたという意味で、竹田の街が育てた音楽家といえる。瀧の旧宅を記念館として公開する際に、音環境の復元もということで、設計のお手伝いする機会を得て、竹田とのご縁が始まった。榎の木々のざわめき、土塀を流れる風音、せせらぎの水音など、日本人の音の原風景を思い起こさせる。来館者が瀧の聞いた音風景を追体験できるように、聞き取り調査もしながら庭づくりをした。一例ではあるが、ゲタを音環境デザイン予算で購入し、敷石や飛石を歩いて土地の音を体験できるよう工夫もした。記念館の仕事を通して、竹田に美しい音風景があったことを実感し、まもることの大切さを痛感したプロジェクトであった。

計画することの背理

いま、その竹田の街を歩くと、県道の側面の大きな楽譜のレリーフに出会う。かつての風情ある岩肌を壊してつくられたものだが、その後も護岸に大名行列の



壁画を設置した。観光振興の一環で設置されたのだろうが、土地固有の風景からの乖離ははなはだしい。

このように公共空間に導入されたアートに異和感を覚えることは少なくない。東京の中野駅南口の街路にはペガサスその他の野外彫刻が置かれているが、唐突である。土地の感性に無関係にアートが使われている。また、墨田区の清掃工場では、近くにハーブ橋があることなどから、煙突のモチーフに笛を用いたり、音楽の小径と称して楽器をテーマにした野外彫刻を並べたりしているが、そうした予算はもっと別な使い方があったのではないかと思わずにいられない。

訪れたい街を、都内で2つあげるとしたら、浅草の仲見世通りとアメ屋横町である。雑踏、屋台、歓声が支配的で、アジアのバザールという感じ。決して美しいわけではないが、魅力的でワクワクする。猥雑だが心がほっとする。都市計画の網からこぼれたところに、結果的にいい音環境が残っている。土地の精霊が囁いている、アメニティーとは本来そういう

wearing wooden sandals. Having participated in this project I could feel that there used to be beautiful sound scenes in Takeda, and felt the acute needs of preserving that element.

* Betrayal of Planning

Walking along a street, one will come across a huge relief of Taki's music score which, in fact, is destroying the natural scenery. It was probably erected to promote tourism, but it stands out disproportionately from the landscape. An object of art is used disregarding its environment. Such cases abound in Japan.

* Deducting Design

Once I visited the top of a hill in a city, and I was shocked to hear the cable community

「新しいパートナーシップ型まちづくり」：新百合ヶ丘街びらき記念シンポジウム

うものだと思う。

マイナスのデザイン

長崎の市民団体が、長崎らしい音環境を市民から募集したことがある。応募の中に稲佐山の頂があったので訪ねると、スピーカから流れる音楽にかき消されて、他の音はあまり聞くことができなかった。早朝なら、鳥の声、風の音、街の音が漂っているのかもしれない。緊急時使用のスピーカに異を唱えるわけではないが、そのように常時たれ流されている人工の音を止めれば土地の音が現出する。そんなデザイン手法も時に必要ではないか。マイナスのデザインが、プラスの価値を生むこともある。

ゼロのデザインもあるだろう。いま手を加えずに保存することも、けっこう難しい時代である。しかし、今日に生きる歴史や記憶の循環の輪が潰れてしまうとすれば、それは後戻りのできない損失である。外部からは窺い知れないにせよ、土地の人の記憶の奥底の心象風景をそっととっておくためのデザインにも、これからは目を向けてほしい。



パネルディスカッション

佐野 寛 クリエイティブディレクター
篠原 修 東京大学工学部教授、景観計画
小林 裕 舞台演出家
石原知久 建築家
納 宏 川崎市助役
大塚洋明 都市計画家(コーディネーター)

インナーシティー問題の教訓

大塚：21世紀の首都圏のあり方を研究するチームに参加しているが、そこでの議論の中心はインナーシティー問題である。東京はじめ、ニューヨーク、ロンドンなど近代の大都市に共通し、都市としての存続に深刻な影を投げかけている。

ロンドンでも70年代に大問題となった。しかしロンドンでは、80年代に入って奇跡的に都心部の再生が図られた。ここでは物理的な再開発ではなく、住民が地域に住み、働ける社会システムづくりが進められたのが功を奏している。その核となったのが、コミュニティ開発法人である。地域住民が自分たちでコミュニティを運営する組織である。

日本では馴染みが薄いと思っていたら、実は新百合ヶ丘の街づくりの中に、新

百合ヶ丘農住都市開発（株）という住民が中心になって運営する街づくりの会社があった。これが核になり行政、民間企業を含めた連携のもとに街づくりが進められてきた。このやり方は、わが国における大都市問題解決のモデルになる。

長寿社会の街づくり

佐野：あと10年で団塊の世代が60才台に入り始める。4人に1人が高齢者になる長寿社会の始まりである。そのとき新百合ヶ丘の街はどうしたらいいか、なにがしか目安を立てておく必要はある。

人生晩年が勝負である。老人になってどう生きられるかが、人生の良し悪しのバロメーターになる。それでは老人の幸せとは何か。老人とは自分たちだけで幸せにはなれず、後に続く世代の幸せを見て幸せになる存在だ。30年前セントラルパークを訪ねた時、平日はベンチがガラガラなのに、週末は老人で一杯であった。何故かと観察すると、平日には閑散とした公園も、週末には若者の歓声が響きわたる。老人の視線はそこに注がれている。なるほどなと納得したものである。

ただし老人といってもいろいろで、今日では70才まで普通に働ける。でも稼ぐためより楽しみを重視し、長時間の通勤は負担だし、街づくりへの参加も考慮すると、職と住は近づかなければ。そろそろ日本の社会も、地域をみんなで運営していくようにならないとやっていけない。新百合ヶ丘ではいまのところ東京都心への通勤者が多い。これから職と住の近接がどれだけできるかが課題となる。

PANEL DISCUSSION

* Lessons from Inner-City Problems

OHTSUKA: The discussion at the "Metropolitan Area of the 21st Century" is focused on the problem of the inner city. This was a big issue in London in the 1970s and in the 80s miraculous resurrection of the city was achieved. The reasons for success were creating a social system that afforded citizens to live and work in the inner city, and that this project was implemented by "Community Development Corporation." I thought this system was not known to Japan, but there is a corporation that was formed by the citizens of Shin-Yurigaoka when the town was going to be constructed.

* Town Building in the Era of Aging Society

SANO: The quality of life in one's later days will serve as a yardstick of one's life. Aged as they may be, those who are in their 70s are still able to work. However, commuting long hours would be burdensome, so if they want to participate in community activities, their home and working places should be close to each other.

* Cooperative Housing

ISHIHARA: Building cooperative houses with people sharing the same values has advantages of sharing common spaces, and when the houses are completed they already know each other and can start their new lives smoothly. There are about 4 to 5 thousand such cases, additionally,

broadcasting from a loud speaker there. If we stop broadcasting, natural sounds might come to be heard. Occasionally we need such reduction of design, and from there we might produce positive values. Zero design, i.e. no designing is also feasible. Nowadays it is difficult to preserve something intact without adding anything. If the existing history or circulating memories are lost, there would be irrecoverable losses. From now on we must pay more attention to keeping the mental images lying at the bottom of people's memories intact.

Keiko Torigoe / Soundscape Designer

コーポラティブハウジング

石原：10年ほど前から、関連のプロジェクトを手掛けてきた。協同組合で集合住宅を建てるのは、住まいに対する価値観を共有し、玄関まわりをはじめ共有部分を共同でつくれ、完成後は隣人たちが顔見知り、新生活のスタートもスムーズといった利点がある。日本での本格的な1号は、新百合丘の柿生地区にある。

欧州では普及しており、例えばスウェーデンでは住宅建設の約20%がこの方式だ。国内の実績は現在までに4~5千戸、ほかに神戸で震災復興の中で約3千戸が動いている。居住者が自分たちで土地の手当から始める場合や、公団・公社が参加者を募集して実施する場合など、やり方はいくつかある。住まい手、土地所有者の間の産直みたいなものもある。

将来的には、マンションの共同建替や路地裏の再開発などでの展開が見込まれる。その際に、個々人の専用スペースを減少させてコモンスペースを充実させることも可能である。そう考えると、住まいづくりの範囲を越えて、街づくりへの参加の幅も広がっていく。

パフォーマンスアートのすすめ

小林：新しい街をつくる時、各々が得意分野で知恵を出し合いながら競っていく、それにより共同体が育っていくと考えている。そこでは、パフォーマンスアート、すなわち演劇が役にたつ。演劇とは、人の心の奥底に働きかけるエネルギーをもっている。

about 3000 houses are being built in the Kobe area after the Earthquake. In some cases, residents take all responsibilities, and in other cases, public housing corporations recruit participants. In the future, cooperative reconstruction of condominiums or redevelopment of back streets are feasible, which will expand people's participation in town development.

* Encouragement of Performing Arts

KOBAYASHI: Shin-Yurigaoka has a festival as local art. A public hall has been also completed. In order to have more participation of the public benches are placed along the promenade walk. If there is a square, plays and musicals could be performed there. If they can maintain these

新百合丘には、郷土芸能としてのまつりがある。ミュージカルの学校がある。ホールもできた。残念なのは室内だけでやってきたこと。実は室内でやること自体が排他的な性格をもつ。住民の参加性を高めるには、屋外でやる方法を考えるべきだ。例えばコンコース、いま通路になってしまっている。そこにベンチを置こう。駅前に老人の休める場所がないのは大問題。広場だと思えば、演劇やミュージカルをやってもいい。まつりもできる。そんな工夫ならすぐにでもできる。

そして、始めよう。何事も続いていくと伝統になり、思い出になる。思い出が子供たちに伝えられ、やがて生きてよかった、暮らしてよかった、そんな街になっていくだろう。心の中に残っていく街づくりが、これからの課題だ。さあ器ができた、あとは演出家と、シナリオと、アクターを、どう揃えるかだ。

日本型アメニティーのデザイン

篠原：明治維新を経て、江戸の街はキレイになった。大名屋敷が多く残っており、都市美を支えていた。そこから、車が通れる街へのつくりかえが始まった。パリやロンドンみたいに広い道路をつくり、両側に高い建物をつくる。途中、震災でこわれ、戦災でこわれ、いまなお達せられないが、出発点の脱亜入欧や技術文明化への意思は続いている。

1919年に日本の都市計画法が定められたが、衛生と防災の2本柱であった。実はお手本にした欧州の都市計画には、第3の柱があった。アメニティー、緑や静

activities, they will become tradition and create memories for the people there and causing them to feel content living in such a town.

* Designing of Japanese Style Amenity

SHINOHARA: In 1919 the law concerning city planning was enacted with two principles of hygiene and disaster prevention. The third principle common with the regulations in Europe, the concept of providing greens and serenity was lacking. We must recognize this now, and contemplate on what Japanese cities should have, such as streams with clear water and seasonal scenery.

* Development of Town Planning

OSAME: In Shin-Yurigaoka, a system of planning and implementation was formed based on

けさなど、人間らしく住むための環境である。産業革命で生活環境が破壊されたことへの反省が背景を流れていた。

日本の都市計画では、スタートから第3の柱が抜けていた。それをいま反省すべきである。だから100年たってもパリやロンドンみたいになれない。元々素質が違うのかもしれない。ともかくこれからは、他にならうのではなく、日本らしい都市のあり方を真剣に考えるべきだろう。清らかな川の流れや豊かな季節感、けっこう日本的である。

次世代への都市づくりの展開

納：新百合丘の街づくりは、ゼロから都市をつくる教科書である。ポイントは、1. 地権者（農家）の街づくりへの熱意、2. 街づくりへの総合的な視点、3. 景観整備の重視、4. 市民、行政、企業のパートナーシップ型、の4点である。そこに、開発協議会、農住都市開発(株)、新都心街づくり財団など、街づくりを考え、実行する仕組みが構築されてきた。都市は生き物である。街びらきを迎え次はどう育てていくか、大きな課題である。

大塚：最後に今後の新百合丘への期待を述べる。まず、30年の蓄積から独自の生活価値を生んでほしい。次に、大震災の到来を想定し、防災の拠点性を高めてほしい。3つ目に、歴史との出会いも含めて豊かなテーマを展開してほしい。

(文責：黒田宏治)

1) enthusiasm of land owners (farmers) for town development, 2) comprehensive development concept, 3) emphasis on preserving scenery and 4) partnership among citizens, the local government and private corporations.

OHTSUKA: I expect Shin-Yurigaoka to upgrade disaster prevention measures, and thirdly to enrich their local culture paying attention to the local history.

Ohtsuka / City Planner

Sano / Creative Director

Ishihara / Architect

Kobayashi / Art Producer

Shinohara / Professor, Tokyo University

Osame / Deputy Mayor of Kawasaki City

「ヒューメイン・ヴィレッジ」の展開 アレクサンダー・マヌー氏 インダストリアルデザイナー



JDのプロジェクトテーマについて

私の事務所の受付には常に2冊のデザイン誌が置かれています。その一つがVOICE OF DESIGN（以下VOD）です。精神的な側面でデザインを論じる本誌と、もの本位のデザインDK誌が、相互に補完する関係になっています。私達が来客に伝えたいのは両面であるのです。VODはテーマが非常に多岐にわたり、しかもそれぞれが非常に深く分析されています。問題に対する深い理解です。

なかでも難民の課題は、将来のデザインのあり方、デザインの使命に関わる非常に重要なテーマで、興味を持って読んでいます。

私は各地の講演会でよくいうのですが、本当のデザインとはモノの背後にあるシステムをデザインすることだと思えます。これをソーシャルイノベーションといっており、デザインによってそこへ到達するという意味で、ソーシャルデザインの考え方に共感しています。「デザインはリーディングインダストリーになり得るか」というテーマがありますが、デザインはそれそのもので何かを達するというものではありません。私達が既に

やっていることであり、デザインはリーディングインダストリーであるのです。

英語圏ではデザインという言葉が多用されすぎています。三島由紀夫は「はがくれ」を定義していますが、本当の愛は、告白しないのが本当の愛であり、欧米人が「I love you, I love you」というのは逆に言葉の価値が下がってしまう。デザインも同じことです。いい感じだなということがデザインがいいということ、デザインという言葉が使われなくなったときに、あるステージに到達したことを意味するのです。

子供の創造環境のテーマに関して

子供の創造環境にとって、体を動かし全身の感覚を通じて経験するスキル（グロス・モーター・スキル）と、レゴのようなインドアでの遊びの中にあるスキル（ファイン・モーター・スキル）の両方が相まったトータルな経験、そして両方をバランスよく生活の中で体験し発達していけるコミュニティをつくる必要があります。

今のおもちゃ会社はと言えば、キャラクターのライセンスを得て売ることが主眼であり、理性的なおもちゃづくりをしていません。レゴに見られるクリエイティブティを育むおもちゃに比べ、たまごっちは爆発的な人気を得て事業としては成功しましたが、おもちゃの部類には入らない。将来の大人を育てるプロセスとしては非常に危険です。

かつては生活の中で親が手や体を動かす姿を体全体でまねして育ちましたが今は親がコンピュータに向かう姿を見て育

つような時代です。この親と子の関係は非常に大きな問題で、地球環境の危機的な状況から人類を守ると言った問題と同時に、子供の育つ環境をどうしていくかという問題は大きな課題です。

ヒューメイン・ヴィレッジ

昨年8月の世界インダストリアル・デザイン会議（主催ICSID）でのテーマは「The Humane Village（ヒューメインヴィレッジ）」でした。ヒューマンという動物的な次元から他を思いやるという倫理的な要素が加わった段階をヒューメインと定義しています。一方、ヴィレッジのイメージとは、非常に保守的で、外部に対して閉鎖的であり、警戒心の強いコミュニティを意味します。つまりヒューメインヴィレッジは、ヒューメインな状況、他との関連ある集団、社会を目標にした一つの考え方、デスティネーションをいっています。今までのヴィレッジへのアンチテーゼと言えます。カナダのコミュニケーション学者のマクルーハンの「グローバル・ヴィレッジ」への対立概念でもあります。マクルーハンが30年前に予測した地球社会は、コミュニケーション網などのグローバルスケールでの発達の結果、逆に排他的な要素が潜む集団、国家への意識を生むことになってしまった。

1960年代私はルーマニアのある村で二カ月間過ごしたことがあります。この村には太鼓をたたいてニュースを伝えに来る人がいて、村人が聞きに集まります。言葉の分からない私でも、村人たちの反応を見て、そのニュースが悲しいニュースか楽しいものなのか理解することがで

Interview with Mr. Alexander Manu, Industrial Designer (The Axis Group Inc)

* JD's Project Themes

I have learned of JD projects through your journal and I am specially interested in the subject of refugees, which is very important for the future of design and its mission. I think that true design is to design a system hidden behind objects. I call it social innovation. I sympathize with the concept of social design in that it is a process leading to social innovation. A question is often asked "Can designing be a leading industry?" I think designing has already become a leading industry.

* Creative Environment for Children

We have to set up two categories of creative environment for children; 1) to develop children's skills (gross motor skill) by making them move around mobilizing all kinds of physical senses, and 2) through indoor games such as playing LEGO to develop their creativity. Earlier, children grew up while watching their parents physically working in their daily lives but now grownups are working facing computer desks. This kind of change is a big problem in the child-parent relationship, as well as problems like protecting the human race from the global crisis of environmental destruction.

* Humane Village

The main theme of the Congress of ICSID held

in August 1997 was "The Humane Village," "Humane" was defined as a viewpoint to be considerate to other living things. The creation of a Humane Village is our ultimate purpose. It can be described as a countertheme to the traditional closed village communities, and also to the "Global Village" cited by Canadian scholar, M. McLuhan. Though CNN can send news reports on a global scale simultaneously, it is objective and gives no consideration to the emotions and situations of those who receive them, so that it is global but inhumane. The idea of humane village is probably an attempt to add moral and ethical elements to the process of achieving social change. If there

きる。その太鼓たたきは村から村へ移動して、それぞれの村のそれぞれの人たちにあつたかたちでニュースを伝えるのです。一方、CNNは瞬時にグローバルにニュースを伝えるけれども、フラットで受け取り手の状況や感情に全く斟酌していないものが伝わるわけです。何が起こったかだけしか伝えないCNNに対して、その人は因果関係やなぜそれが起こったのか、どういう風になったかを伝えます。つまり、私達はグローバルだけれどもヒューメインではないという要素そのものに着目しました。現代そのものがヒューメインかどうかということです。目標そのものではないかもしれないけれども、目標への過程に道徳、倫理的な要素を加えていこうという試みかもしれません。この考え方に傾倒していくに従って、今

までの手法に疑問を覚え、例えば環境問題やグリーンムーブメントにしても彌縫(びほう)策の集まりなんではないかと思えてきたりします。

私達がこの考え方に行き着き、何か期待があったとすれば、この呼びかけに触れて興味をもち人生観を感じて、組織的な動きではなくても何か行動にうつすという人がでてくることでした。

Design for the World

今、専門別になっているデザインの国際団体を横切りにする新たなデザインの世界機構「Design for the World」(略称DW)の設立準備作業を栄久庵氏らとともに進めています。DWは世界規模のプロジェクトをつくり、推進するというメカニズムです。ヒューメイン・ヴィレッジというイデオロギー、またJDのスタデ

ィーなどが結合し、相互に働きあえればいいと考えます。デザインが世界規模の諸問題を解決するというイデオロギーをかかげるのであれば、アクションプロジェクトを通じ実証したい。プロジェクトで、デザインは問題を解決するパワーがあるということを実証しなければならぬと考えます。

(1998年7月14日、伊坂+小木)



アクセス・グループ(トロント)代表。製品開発の実践的なデザイン概念として「ツール・トイ」をまとめ、出版されている。DW理事。

Design for the World 概要

経緯

細分化したデザインの国際専門団体を横切りにして様々なグローバル 이슈に立ち向かうための新たなデザインの世界機構 Design for the World (DW) が設立されました。デザインの専門分野は、IDやグラフィック、インテリア、クラフト、建築、都市デザインなどの各専門分野別に分かれて国際組織をつくり活動をしてきました。しかし、地球環境問題、資源エネルギー問題、社会的弱者対策そして難民問題など、細分化した専門分野だけでは取り組むことのできない課題群を前に、専門の協同の場づくりが必要との認識にたつてこの機構が生まれました。DWは、今日のグローバル 이슈をデザインプロジェクトとして提起する場として、また国連諸機関などと協同する場として、これからの地球社会に貢献することを

目的としています。

発起会員となる国際デザイン専門団体による発起総会(1998年7月23日)において、11名の理事が選出され、会長に日本の栄久庵憲司氏が選任されました。

役員

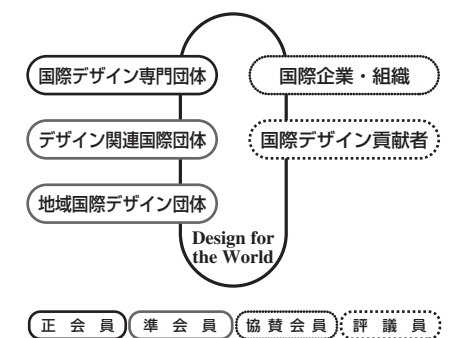
会長：栄久庵憲司(日本) 理事長：アンドレア・リカルド(スペイン) 副理事長：ロバート・ブレイク(米) オーガスト・モレロ(伊) 財務：アントニ・ピーグ(スペイン) 理事：フィリッツ・フランケル(独) マリアヌス・フランドセン(デンマーク) デビッド・グロスマン(イスラエル) デ・ロウブシャー(南アフリカ) アレクサンダー・マヌー(カナダ) ガイ・ショッカート(ベルギー) 事務総長：マイ・フィリップ(スペイン)

発起国際デザイン専門団体(略称)

ICSID, ICOGRADA, IFI, BCD

事務局

Av. Diagonal, 452, 5 a planta
Barcelona 08006, Spain
Tel. 34-3-218-2822 / Fax. 34-3-237-2219
E-mail : bcd@cambrabcn.es



were some expectation of this idea, it was that there would be someone who would be interested in this way of thinking and who would attempt to do something for the cause even on a personal level.

* Design for the World

Currently I'm promoting the establishment of the Design for the World together with Mr. Ekuan and others. DW is an organization to compile and promote a global scale project combining such subjects as Humane Village and JD's research topics. We have to be able to prove that "design" has problem-solving power.

Design for the World (DW) OUTLINE

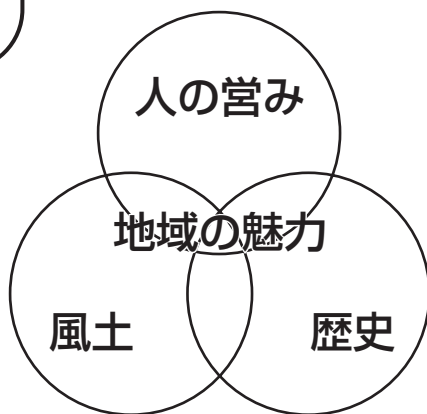
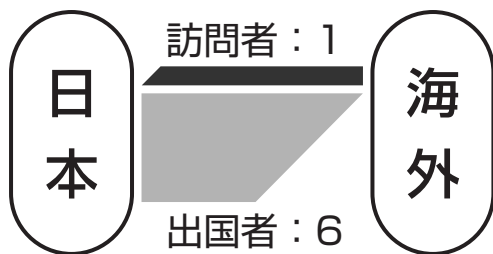
The design professions have been active in respective fields of design such as industrial design, graphic design, interior design, craft design, architectural design, urban design and others in international scale. The establishment of DW have been urged by recognition of mounting global problems that surpass the competence of any given single field of design activity such as ecology, energy and resources, social inequities, refugees and many others. The recognition has led to have mutual venue for multi-disciplinary cooperation in form of the entity. DW is aiming to contribute future global society

in providing a venue for proposing a project by compiling the global issues, and a venue for cooperation with other international organization such as the United Nations.

On July 23, 1998, eleven executive board members were elected at the general assembly of founding members, consisting of international professional organizations (ICSID, ICOGRADA, IFI, BCD), and Mr. Kenji Ekuan of Japan was elected as the chairman.

京都シンポジウム「観光のためのデザイン — 大交流時代の都市・生活」

開催にあたって



海外に出かけていく日本人の数は、ここ10年くらいで急激に増えている。97年の数字で約1680万人、そのうち観光客が約1377万人である。逆に、海外から日本にやって来た旅行客の数は約240万人。つまり、海外へ出かける日本人観光客の数にくらべると、日本への観光にやってくる外国人の数は、約5分の1から、6分の1にとどまるという、統計数字が出ている。

これを日本人の海外旅行人数がむしろ多すぎるのが原因と、見るべきかどうかだが、主要国の海外旅行客数と、わが国のそれを比べてみると、やはり日本が観光国として魅力に乏しいのではないかと、思わざるをえない（95年の数字で、フランスとイタリアの観光客受け入れ数字はそれぞれ、フランスが6011万人、イ

タリアが3105万人であり、フランスは、実に日本の25倍の外国人観光客を集めている）。

国にかぎらず、観光でもっとも重要な要素は、なんといってもその土地の魅力である。外国人にとって、円高や、日本の宿泊施設の値段の高さなどいろいろ阻害要因はあるのだろうが、日本を見たいという動機がないかぎり、行く先の候補にすら上がらない。そこでは、日本観光の促進要因に磨きをかける工夫が、まづ必要だろう。

その意味でデザインは、これからの観光開発の手段として、まっ先にあげられるべきである。特に都市の観光開発には、それは最も有力のツールとなろう。

田村明氏（法政大学名誉教授）は、都

ment to bring in tourists is the charms of places as tourist destinations. There are some obstacles such as high Yen value and also the lack of moderately priced accommodation facilities. But the greatest element is whether people have strong motivation to visit Japan in spite of these setbacks. Therefore, we must mobilize our ideas to enhance the tourist attractiveness of Japan. On this score, better designs should be considered as the first means of developing tourism. Specially it is powerful for the development of urban tourism. Prof. A. Tamura describes the attraction of a city as the combination of the natural features, history and people's life. Using his yardstick it can be said that

開催要項

主催：日本デザイン機構

後援：京都新聞社

日時：10月30日（金）

13：00～17：00

場所：京都新聞文化ホール（京都市）

内容：講演「迎賓都市のデザイン」

栄久庵憲司 日本デザイン機構会長

講演「観光革命の時代」

石森秀三 国立民族学博物館教授

座談「都市観光のデザイン」

恩地 惇 環境デザイナー

高木壽一 京都市企画監

山崎鉦雄 (株)JR東海ツアーズ社長

佐藤典司 立命館大学教授

(コーディネーター)

市の個性＝風土×歴史×現在の人の営み、と述べる（「美しい都市景観をつくるアーバンデザイン」朝日新聞社より）。この方程式にしたがえば、日本全体が、これまで、現在の人の営みにばかり力を注ぎ過ぎ、風土と歴史を大切にすることを忘れてしまったことが、よその国はおろか、自国の人間からみても、どこの都市も没個性で、観光的魅力を無くしてしまった原因、という見方ができるだろう。

今こそ、われわれデザイン世界に生きる人間によって、風土と歴史と人々の営みの、バランスのとれた都市づくりを再開しなければならない。京都がその象徴例となるべく、今回のシンポジウムは企画された。

佐藤典司／立命館大学教授

Japan has been putting too much emphasis on people's life, and has forgotten to render attention to maintain the natural features and the history of the city. This is probably the reason that most of our cities lack their individual charms, lack tourist attraction for not only foreign visitors but also to Japanese people as well. It is time to restart well balanced city planning of natural features, history and people's daily activities.

Noriji Sato / Prof. Ritsumeikan University

JD SYMPOSIUM :

DESIGNS FOR TOURISM

- Cities and Lives in the Era of Great Journey

The number of Japanese overseas travelers is rapidly increasing in the last decade. In 1997 out of a total of 16.8 million travelers 13.8 million were tourists. However only 2.4 million foreign tourists visited Japan in the same year, one fifth or sixth of the Japanese going overseas. From this figure we must say that Japan lacks the charms of tourist resources compared to other leading countries such as France that has been attracting 25 times more tourists than Japan. The most important ele-

海外情報 講演「From Design for All To Design by All」リチャード・ロジャース

ヨーロッパ障害とデザイン研究所機関誌「EIDD」98年春号より

本日の論点は文化的・技術的デザインを考える上での推移と、誰のためのデザインかということに関わります。それはまた、特に米国において、100年以上に渡り、かよわい、特別な存在として扱われた障害をもつ人々を「区別された人々」と承認し確立した方法に関わります。

1978年デンバーで、インアクセスビリティ（社会参加が困難であること）に抗議する車椅子利用者によって、初めての大規模な公式デモが行われました。この、地方で起きた歴史的瞬間の5年前には、年々反差別法の制定が広がる中で、州レベルの障害者反差別法が制定されました。さらに1983年障害者国民協議会が創立、90年アメリカ障害者アクトが立法化されました。

「アメリカ障害者アクトは、障害を根拠に、州および地方政府により与えられる雇用やプログラム、サービスの差別、私企業による商品やサービスの差別、商業施設における差別を禁止する」(司法省)1992年1月のデッドラインが取り決められ、90年以降、建築・コミュニケーションバリアを取り除く努力が進められました。一方、法制定に関わる歴史とは必ずしも一致しない障害者に対する米国の意識の推移をたどってみたいと思います。

まず第一世代は慈善型で、グッドウィルインダストリーによって具現されました。一種の救世軍型で、寄付による古着などの不要品を作業工場で障害者が仕分け、洗濯し、売るといった一連の雇用機会を与え、さらなる仕事を得る資金づくりのため、この種の仕事の訓練のために

機能し、今日も活動は続きます。

第二世代は障害保障型もしくは退役軍人管理型で具現されます。身体的なロス、賃金のロス、労働の可能性のロスに対する保証金を受けるといった方法です。

1950、60年代に起こった州施設の閉鎖は保護からコミュニティーケアへの変節点を意味しました。しかし第一世代、第二世代は、グッドウィルに見られるように経済的な成功を収め、また時代とともに移り変わりながら存続した状況で、第三のかたち「自立」が徐々に現れます。これは「地域参加サービス法案」という確実なかたちで具現化されます。

若いころ私はニュージーランドで、障害者の自立生活の前触れであった、グループホームコンセプトを知りました。また、父は近年アトランタ・パラリンピック村を作りました。計画された障害者のためのユートピアは、この施設内にいる限り全てに問題なくアクセスすることが可能です。しかし米国での主張は自立であり、自立生活支援技術を通じての普通の生活でした。

私にとって「デザインフォーオール」は社会運動としてでなく、技術文化の運動として受け止められます。また、かつてAT&Tの技術者と経営陣を再編成した「ユニバーサルサービス」と同じように、一つの組織をまとめる力をもつ、一種のスローガンであり、全てのデザイナー、デザインに関わる全ての組織に対する指導的なビジョンだととらえます。

オランダは人工的につくられた景観であり、生産された自然であり、デザイン

の機会、つまり開発されるべき機会があります。人間の身体も、いったん障害を持つことが社会的そして医学的問題と定義づけられると、身体の再デザインが必要とされ、私たちは明らかに身体を景観にあわせるためのデザインの事例をもっています。しかしこれは「デザインオブオール」であって、反デザインフォーオールであるといえます。「景観に身体をあわせるか」「身体に景観をあわせるか」どちらの再デザインかという問題です。

ワシントンD.C.では、カフェのTVモニターの全てに字幕がついていました。騒がしいカフェでは誰しも聴力を試されますがこの例はデザインフォーオールといえます。スミソニアン自然史博物館では「ブラインド・ツアー」というプログラムが盲目専用ということだけでなく用意されています。3つめの例はデラウェアのレホベス・ビーチで見つけたビーチ車椅子です。楽し気に、挑戦しようとする人々の列を見ました。“椅子”という気配はなくなっていました。このように身体を再デザインしたりする代わりに、私たちは「特殊な需要へのデザイン」ではなく「状況的に必要とされたもの」を調節するプロダクトや技術文化をつくる挑戦をするべきでしょう。

リチャード・ロジャース：アムステルダム大学技術文化史教授。近年ロイヤルカレッジオブアートでコンピュータに関するデザインIDの講義を行う。

EIDD=European Institute for Design and Disability：バリアフリーデザインの理想を押し進めることにより、市民全ての生活の向上に貢献する。

Richard Rogers from EIDD Spring 1998

Over the years, movements for anti-discrimination laws expanded and as a result, federal anti-discrimination laws for the handicapped were enacted in 1973. The first major public demonstration by wheelchair users against inaccessibility took place in Denver in 1978. In 1983, the National Council for Persons with Disabilities was established. After the Americans with Disabilities Act was enacted in 1990, architectural and communication barriers would have to be removed. Apart from the legislative movement, there have been three overlapping generations of

American consciousness towards the disabled which can be summarized in "pity, dependence, and independence." The first is the charity model, embodied by Goodwill Industries. It solicits and receives donations of old clothes and household items for the good cause. The second "dependence" is embodied in the disability insurance model through which disabled people receive benefits and are treated as pensioners. The closure of state institutions in the 1950s and 60s marked a turning point from custodial to "community care," from which a third model "independence" emerges. This is currently embodied in the "Community Attendant Services Bill."

To me, "Design for All" can be conceived not as a social movement but as a techno-cultural movement, and as a guiding vision for every designer and every institution dedicated to design. There are already heterogeneous or heterotopic designs for particular situations which are mainstreaming. We should take up the challenge of making products to accommodate "situationally-challenged" instead of "special needs design." These would be the leading-edge products for us all.

EIDD : European Institute for Design and Disability

From the Secretariat

事務局から

インフォメーション

9月28日(財)日本産業デザイン振興会主催のシンポジウム「グローバルスタンダードとローカルアイデンティティ—ドイツらしさと日本らしさ」に出席しました。iF Design Hannover代表のラルフ・ヴィーグマン氏の話の中で、現在iF賞のなかに設けられているエコロジカル・デザイン アワードを、5年後には廃止し、プロダクト・デザイン アワードへ吸収するとのコメントがありました。ドイツではエコロジカルであるというテーマはもはやテーマではなく、デザインの、ひいては産業活動や生活の前提条件であるという背景をあらわしていると思われる。(小木)



広報委員会

「やさしいデザインの本」出版計画

広報委員会でやさしいデザインの本の

Information

I attended the JIDPO Symposium "Global Standards and Local Identity - German-identity and Japanese-identity." The representative from iF Design Hannover revealed that the Ecological Design Award will be abolished 5 years afterwards. It suggests that being ecological is a matter of course in Germany not only in design but in all industrial activities.

(Kogi)

Book on Design for All

The Publicity Committee is now promoting the plan to publish a book on design for all. Although the word "design" is popular, there is

出版企画を進めています。デザインという言葉が一般化しているにもかかわらず市民の視線でデザインを説いた本がありませんでした。身の回りから都市までをビジュアル(イラスト、写真など)な素材と平易な文章で構成した本として出版しようとするものです。

10代の子供から今の生活に疑問をもっている情報コンシャスな市民を対象に、これからの生活の質を考えながら、デザインは楽しいものという一種の啓発の書として検討しています。また生活やデザインに対する批判精神を取り込んだものとしても検討しています。

具体的な内容に関しては、先に実施した「デザイン100話のアイデアアンケート」などがベースとなります。登場人物を定め、彼らを通じて様々なシーンでのデザインのテーマを考えてゆきます。さらにアイデアをお寄せください。

立ち上がりの企画を固めるべく広報委員会の犬養智子、佐野寛、林柳江、柳生功の諸氏に機関誌担当の佐野邦雄氏を加えたメンバーでスタートをきっています。編集メンバーとして参加を希望の方や内容アイデアなどについて積極的なお申し出を待っております。事務局までご一報ください。(伊坂)

編集委員会から

シリーズ特集第2号をお届けします。編集委員会も省エネ、エコ編集を心がけ・・・と言えば聞こえがいいのですが、力不足を誤魔化すために「公開座談会」を仕組み、錚々たる会員の皆様、石

no book explaining design from a citizen's point of view. The book will be a visual presentation using photos and illustrations showing design examples ranging from daily commodities to urban planning with plain explanations. The book will target teenagers and adults who are keen to enhance the quality of their lives. It will be compiled so as to help readers find that designing is fun. It will also be edited from a critical viewpoint on the trends in contemporary life and designs prevalent today.

From the Editorial Committee

We, the Editorial Committee members tried to implement energy-saving, ecological editorial

山修武、金子修也、小林治人、田村国昭の各氏(50音順)にお出まし頂き、貴重なお話をうかがえました。さらに、お願いから当日までの少ない日時にもかかわらず、大部の資料までご用意いただき、重ねて厚く御礼申し上げます。

また、傍聴におはこび頂きました皆様からも活発なご意見やご質問を頂き、編集委員会としては望外の喜びでした。ありがとうございます。用意した席数が少なく、お申し込み頂きながら、おことわりせざるを得なかった方々にはおわび申し上げます。当日のエッセンスが本誌に詰まっておりますので、じっくりお読みいただき、ご意見ご感想をお寄せいただければ幸いです。

さて、エコデザイン特集を組むに際し、デザインのエコロジカル志向はいつの頃からだろうと、素朴な疑問を抱いたエコデザインには全く素人の編集委員会は、エコデザインにこだわらずメモ程度でよいから、時の流れとデザインの間接関係を表にして見ようと試みました。戦後世界の流れ、日本の世相にエコ関連の事象を付け加え、デザインの事象欄はエコとは関係なくどんなプロダクツがあったのか、引き比べて見たかったのです。たいへん荒削りで中途半端ですが、誌面に挟みま

(迫田)

VOICE OF DESIGN VOL.4-3

1998年10月25日発行

発行人/栄久庵憲司 編集人/佐野邦雄

編集委員/迫田幸雄(委員長)、鳥越けい子、黒田宏治

発行所/日本デザイン機構事務局 〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-2-18 虎ノ門興業ビル7F

印刷所/株式会社高山

policies. We organized an open roundtable discussion with distinguished designers, from whom we could obtain precious information. To our great pleasure, there were a number of participants in the floor who took part in the discussion positively. The contents of the discussion are condensed in this issue. In order to take up eco-design as a feature subject, Editorial Committee members, all of them are strangers in this field, attempted to make a chronological chart of product designs with references on historical events and ecological incidents. It is not yet complete, but it is included in this issue. (Sakoda)